

A1112-02

0385-9886/12/¥500/ 論文 /JCOPY

[連載コラム：第17回]

とげぬき地蔵が選ぶ 元気をくれる経営者紹介

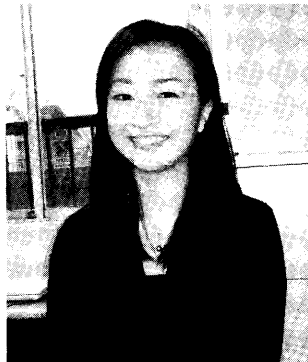


とげぬき地蔵

「この連載コラムで紹介する経営者をどのような基準で選んでいるんですか？」と聞かれたことがある。その答えは3つ。「仕事を通じての自己実現が社会貢献に直結していること」「人を包み込む温かいオーラを発していること」そして「笑顔が素晴らしいこと」である。

今回ご紹介する浅野アディックス純子さんも、その3つの条件を備えた魅力ある経営者である。

浅野さんは1976年6月生まれ。進学した学習院短期大学を1年後に休学してオレゴン州コースベイ短期大学に留学、その後さらにコロラド州デンバー大学で会計学を学び会計士(CPA)の資格を取得、ニューヨークの



会計事務所に勤めることが決まっていた矢先、彼女の人生設計を大きく変える事件が発生した。2001年9月11日のアメリカ同時多発テロである。彼女の就職内定先の企業も尊い人命を含み大きな損害を被ったことで浅野さんはアメリカでの生活を断念して帰国した。アメリカでの生活体験について当時を振り返って浅野さんはこう語ってくれた

「とにかく留学したかったんです。最初はカリフォルニアに行ったのですが、あまりに日本人が多いのに閉口して、とにかく日本人が少ない所ということでオレゴン州コースベイ市を選びました。アメリカで生活して良かったことは、日本という自分の国を改めて客観的に見つめなおすことができたということ。日本ではまず使われない『人種差別』というものもそれなりに体験できましたし。そして、同時多発テロが起きて、リセットされたという感じが

な。」

日本に戻った浅野さんは、日本と海外の架け橋になりたいという思いから、世界に通用する技術を持ち、特にプリント配線板で大きなシェアをもっていたメーカーに就職、2003年に転職してシーエスケイベンチャーキャピタル(現ウイズ・パートナーズ)の海外投資部で、海外企業の日本市場でのビジネス展開ををサポートする業務に従事した。そして、あるパーティーの席で生涯の伴侶となるアディックス氏と運命的な出会いを果たすことになった。

VCを寿退社し、29歳で結婚した浅野さんが、結婚前に3ヶ月間ほどご主人と彼の故郷であるドイツのプレーメンを訪れたときのことを語ってくれた。

「とにかく、日々驚きの連続！結果としてドイツ人に対する印象がとても良いものになりました。とにかく良い意味で生活が質素で節約家。日本人のように新しいモノにすぐ飛びつかずに慎重に判断する。特にカルチャーショックだったのは、カルテスエッセンと言うのですが、夕食も黒パンとチーズといった冷たい食事です。夕食に手間かけずに、その分家族との対話をゆっくりしましょうということなんです。準備にかかる時間はほんの数分、火を使わない、調味料を使わない、後片付けも食べた人が自分で済ます。それによって生まれるのは家族と一緒に語らう時間ということです。それがどんなに大切なことか身をもって体験できました。」

ご主人との結婚式を明治神宮で行った浅野さんが次にしたことは、子供ができてもしっかりと仕事を探すこと。しかし、それは予想をはるかに超える大変なことであった。

「子供を産むということは人間として当然のことで、別に野心的なことでもないのに、何故そんな当り前が叫びたい社会なのか？」

多くの起業家がそうであるように、浅野さんは世の中の不条理に対して諦めるのではなく、自らがその不条理を解決する道を選んだのである。

そしてまず彼女が取り組んだのは女性に優しい企業のデータベースを作るために起業して、仕事と子育ての両立を目指す女性を支援すること。2006年10月に株キャリアナを設立し、コミュニティーサイト「キャリアナハーツ」を立ち上げる。



そこで展開するのは在宅のお母さんへの仕事の斡旋や便利な商品や情報交換の場の提供、さらには集まった会員同士の学びや対話を演出することである。

一方、浅野さんご夫婦にはなかなか子供が授からなかったため、不妊治療を続けた結果、2010年11月、待望の女の子誕生。「不妊治療は時間もかかり大変でしたけど、とても良い経験になりました。私のモットーはネガティブな局面になると、それをなんとかポジティブに変えようとする事かな。生まれてきた子供には、ドイツ語で『神様からの贈り物』という意味のAIKAから『愛華』と名づけたんですよ。」と笑顔で語ってくれた。

自らが母親となった浅野さんだが、それ以前から彼女の少子化に対する問題意識がどんどん高まり、社会問題として取り組むべきテーマという認識から、2009年6月にはNPO法人「第3次ベビーブームプロジェクト推進委員会」を立ち上げる。

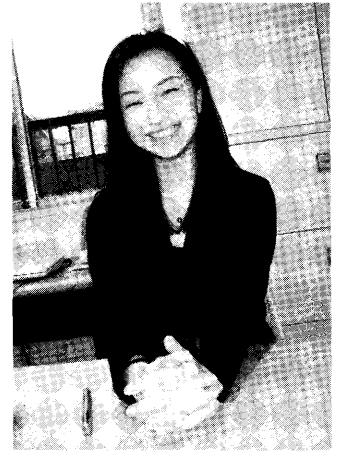
日本では、もう30年以上も少子化傾向が続いているが、一方では、今と30年前の理想の子供数はほとんど変わらないという。つまり少子化現象は、「産みたくても産めない社会」の結果であり、多くの人が社会や家庭からのサポートを必要としていると浅野さんは考える。だからこそ、国、自治体、企業、個人等、社会全体で一致団結して、少子化問題の解決に向けて本気で取り組む必要があるし、そのための母体としてNPO法人の存在が重要になると浅野さんは言う。

このNPOが展開しているのは、子育てを楽しくすることと子育ての楽しさを伝えること、妊娠・出産

についての正しい知識を広めること、産みたい人が安心して産める社会の実現に向けてコラボレーションを進めることなどである。キャリアナと第3次ベビーブームプロジェクト推進委員会、この2つの活動を両輪として浅野さんは社会に対してメッセージを出し続けている。

「社会に母親の視点が欠落すると、世の中がどんどん変になると思うんです。今はいわゆる偉い叔父様たちが信頼を失いつつあるでしょ。それに代わる信頼は何かというと母親の声しかない。母親の声を大切にする社会は、子供の笑顔を大切にする社会だと言えるのではないかな。奥さんは夫を、夫は奥さんを大切にする、夫婦は子供を大切にする、そして社会が家庭を大切にする、そういう当り前の健康的で健全な社会を創っていかねければならないし、それこそが働く意味、働く目的でもあるということです。物心両面で海外から学ぶこともたくさんあると思います。例えば、いまドイツのオーガニック食品の輸入販売に取り組んでいるんですが、ドイツで何故女性の2人に1人がオーガニックを選ぶのかということを学ぶのも大切。つまり、自分たちが健康でなくて何故子供達の健康を守れるのかという意識です。その意味でも原子力発電所の事故以来起きている様々なことに心を痛めていますし、幸せな家族、幸せな社会に逆行する行為や考え方を許容してはならないと思います。」

今回のインタビューの最初から最後まで笑顔を決やすことなく思いを伝えてくれた浅野さんに家庭人として、そして母としての愛情と強さを見た。今後の彼女の活躍に期待し、応援していきたい。



(株)キャリアナ

URL : <http://www.careena-hearts.jp/>
第3次ベビーブームプロジェクト推進委員会

URL : <http://www.bbproject.jp/>